

寺山修司
春日井建
石川不二子
佐佐木幸綱

現代短歌大系 第九卷 (全十二巻)	一九七三年一月三十一日 第一版第一刷発行	編者 大岡 信 塚本 邦雄 中井 英夫 ©一九七三年	発行者 田川 敬吾 株式会社 三一書房 東京都千代田区神田駿河台二の九 電話〇三(二九)三三三番 振替東京 八四一六〇番	印刷所 第一印刷株式会社 製本所 株式会社鈴木製本所
---------------------------------	-----------------------------	---	--	---------------------------------------

現代短歌大系

第9卷 目次

寺山 修司 〇〇三

春日井 建 〇八三

石川不二子 一六三

佐佐木幸綱 二四三

解説 上田三四二 三47

編集協力

齋藤 慎爾

篠 弘

正津 勉

富士田 元彦

装幀

澁川 育由

寺山修司



寺山修司 略歴

昭和11年1月、青森県に生れる。29年青森高校卒業、早大入学。同年「短歌研究」新人賞に「チェホフ祭」が特選。31年、早大中退。短歌、詩、戯曲、エッセイ、小説、映画シナリオ、ミュージカル、放送作品などを、文芸誌をはじめとするあらゆるジャンルの諸雑誌に発表。39年、詩劇「大神の女」で久保田万太郎賞、放送叙事詩「山姥」でイタリア賞グランプリ。主要著書に歌集『血と麦』（36年）、『田園に死す』（41年）、『寺山修司全歌集』（46年）、戯曲『寺山修司の戯曲』（47年）、評論集『遊撃とその誇り』（41年）、『戦後詩』（40年）、等多数。広く海外にも翻訳出版。現在、劇団「天井桟敷」代表。46年からは映画の監督、レコードの作詞、制作でも活躍、海外公演も多い。

寺山修司 目次

田園に死す (完本) ———— 307

抄 ———— 339

初期歌篇 空には本 血と麦 テーブルの上の荒野

寺山修司論 篠田正浩 ———— 369

抄出について

ここでは第三歌集『田園に死す』を完本とし、『空には本』以下を抄としたが、その初期作品の比類のない無垢の青春をこよなく愛する一人として、比重はおのずからそちらに重くなっている。著者が海外旅行中のため、依頼を受けて抄出した。

中井英夫

田園に死す(完本)

目次

恐山	〇一〇
少年時代	〇一〇
悪霊とその他の観察	〇二二
長歌 指導と忍従	〇二三
犬神	〇二三
寺山セツの伝記	〇二三
法医学	〇二四
子守唄	〇二五
捨子海峡	〇二五
暴に与ふる書	〇二六
長歌 修羅、わが愛	〇二七
山姥	〇二九
むがしこ	〇二九
発狂詩集	〇三〇
家出節	〇三二
終りなき学校	〇三三
家畜たち	〇三三

新・病草紙——〇三

さはるものにみな毛生ゆる病——〇三

眼球のうらがへる病——〇四

大足の病——〇四

時計恐怖症——〇六

鬼見る病——〇七

室内楽——〇八

首吊り病——〇九

変身——〇〇

新・餓鬼草紙——〇三

善人の研究——〇三

悲しき自伝——〇三

言葉餓鬼——〇四

母恋餓鬼——〇四

天体の理想——〇六

跋——〇七

これはこの世のことならず、死出の山路のすそ野なる、さいの河原の物語、十にも足らぬ幼な児が、さいの河原に集まりて、峰の嵐の音すれば、父かと思ひよぢのぼり、谷の流れをきくときは、母かと思ひはせ下り、手足は血潮に染みながら、

川原の石をとり集め、これにて回向の塔をつむ、一つつんでは父のため、二つつんでは母のため、兄弟わが身と回向して、昼はひとりで遊べども、日も入りあひのその頃に、地獄の鬼があらはれて、つみたる塔をおしくづす

わが一族の歴史「恐山和讀」

恐山

少年時代

大工町寺町米町仏町老母買ふ町あらずやつばめよ

新しき仏壇買ひに行きしまま行方不明のおとうとと鳥

地平線縫ひ閉ぢむため針箱に姉がかくしておきし絹針

兎追ふこともなかりき故里の銭湯地獄の壁の絵の山

売りにゆく柱時計がふいに鳴る横抱きにして枯野ゆくとき

間引かれしゆゑに一生欠席する学校地獄のおとうとの椅子

町の遠さを帯の長さではかるなり呉服屋地獄より嫁ぎきて

夏蝶の屍かばねひそかにかくし来し本屋地獄の中の一冊

生命線ひそかに変へむためにわが抽出しにある 一本の釘

暗闇のわれに家系を問ふなかれ漬物樽の中の亡霊

悪霊とその他の観察

たつた一つの嫁入道具の仏壇を義眼のうつるまで磨くなり

老木の脳天裂きて来し斧をかくまふ如く抱き寝るべし

中古ちゅうぶの斧買ひにゆく母のため長子は学びをり 法医学

いまだ首吊らざりし縄たばねられ背後の壁に古びつつあり
 ほどかれて少女の髪にむすばれし葬儀の花の花ことばかな
 畳屋に剝ぎ捨てられし家霊らのあしあとかへりくる十二月
 川に逆らひ咲く曼珠沙華赤ければせつに地獄へ行きたし今日も
 忘れし遠き空家ゆ　山鳩のみづから処刑する歌聞ゆ
 地平線揺るる視野なり子守唄うたへる母の背にありし日以後
 売られたる夜の冬田へ一人来て埋めゆく母の真赤な櫛を

畏歌 指導と忍従

無産の祖父は六十三番地は四五九で死方より　風吹き来たる　仏
 町　電話をひけば　一五六四　隣りへゆけば　八八五四　庭に咲
 く花七四の八七　荷と荷あはせて　死を積みて　家を出るとも　憑
 きまとふ　数の地獄は　逃れ得ぬ！　いづこへ行くも　みな四五九

地獄死後苦の　さだめから　名無し七七四ななしの　旅つづき　三味線抱
きて　日没の　赤き人形になりゆく

かなしき父の　手中淫　その一滴にありつけぬ　われの離郷の日を
思へ　ふたたび帰ることのなき　わが漂泊の　顔を切る　つばくら
めさへ　九二五くふご一四　されど九二こひしなき家もなき　われは唄好き　念
仏嫌ひ　死出の山路を　唄ひゆかむか

犬神

寺山セツの伝記

13
亡き母の真赤な櫛で梳きやれば山鳩の羽毛抜けやまぬなり
亡き母の位牌の裏のわが指紋さみしくほぐれゆく夜ならむ
トラホーム洗ひし水を捨てにゆく真赤な椿咲くところまで

念仏も嫁入り道具のひとつにて満月の夜の川渡り来る

大正二年刊行津軽行刑史人買人桃太はわが父

村境の春や錆びたる捨て車輪ふるさとまとめて花いちもんめ

鋸の熱き齒をもてわが挽きし夜のひまはりつひに 首無し

濁流に捨て来し燃ゆる曼珠沙華あかきを何の生贄とせむ

子守唄義齒もて唄ひくれし母死して炉辺に義齒をのこせり

灰作るために縄焼きつつあればふいにかなしも農の娶りは

法医学

てのひらの手相の野よりひつそりと盲目の鴨ら群立つ日あり

生くる蠅ごと燃えてゆく蠅取紙その火あかりに手相をうつす

見るために両瞼をふかく裂かむとす剃刀の刃に地平をうつし

七草の地にすれすれに運ばれておとうと未遂の死児埋めらるる